

年月日	概	要	摘要
昭 15 7 10	軍令陸甲才一〇号により編成下令		
昭 16 7 16	東安省密山県斐徳において編成（編成担任部隊 林口陸軍病院） 臨時編成改正（甲）下令		
昭 20 7 下旬	編成改正完結（編成人員、約七〇名） 同日より牡丹江に移駐まで同地付近駐屯部隊の患者の収容ならびに診療 主力は、牡丹江に移駐開始		
	將校以下約一〇名を斐徳に残置し、患者の収容に当らせたが、開戦時までに軽症患者を部隊に復帰させ、重傷患者は牡丹江才一陸軍病院、東安才一陸軍病院に後送し、日「ソ」開戦とともに本隊（主力）と分離行動をとつた。		

## 斐徳陸軍病院略歴

(関東軍才六九陸軍病院)

通称号 満才三四八部隊

鋭才一三〇一四部隊  
鋭才二一〇八五部隊

2015

昭									
20									
8	8	9	9	9	8	8	8	8	8
11	9	20	11	5	17	15	11	9	2
<p>主力は牡丹江に移駐完了（牡丹江星輝寮）後、牡丹江才一陸軍病院の軽症患者を収容したが開戦時までにはほとんど原隊に復帰させた。</p> <p>寧安県掖河に移動、牡丹江才一陸軍病院の援助業務を実施</p> <p>看護婦および女子軍属を哈爾濱陸軍病院に輸送（男子軍属は主力と同行動）</p> <p>掖河出発、牡丹江を経て横道河子に移動</p> <p>横道河子において武装解除同日拉古出発</p> <p>拉古才一八作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>綏芬河経出入「ソ」</p> <p>残 留 隊</p> <p>残留隊は患者を後送後、斐徳駐屯の野戦重砲兵才二〇連隊の残留隊と共に勃利街道を後退</p> <p>勃利着、途中数名の行方不明者をだし、本隊（主力）に合流すべく出発したが、牡丹江に直行不能のため、佳木斯を経て哈爾濱に向かう。</p>									

2016

			自 至 昭 21			
	4	4	4	9	8	8 8
	18	10	上 旬	2	21	17 16
	<p>哈爾濱着</p> <p>先発の看護婦および女子軍属は、才四軍軍医部長の指示により臨時編成された衛生部隊（主として後退した杏樹陸軍病院）に合流し、傷病患者の収容に任じた。</p> <p>同地において武装解除</p> <p>「ソ」軍の指揮下に入り、虎林陸軍病院の看護婦（約三〇名）と衛生兵若干を加え、拉古收容所に向かい、同地において一般邦人の治療に従事、その後「ソ」軍の野戦病院と共に伝染病患者の収容に任じた。</p> <p>「ソ」軍の命令により解散、旧牡丹江調東才八病院（「ソ」軍下の日本軍人俘虜病院）に合流した。</p> <p>看護婦、衛生兵の一部は残留後留用されたが他はほとんど入「ソ」。</p> <p>病院長</p> <p>軍医中佐 久貝博 雅</p>					

2017

年月日	概要	摘要
昭15 7 10	<p>軍令陸甲第一四号により編成下令 東安第一陸軍病院よりの転属者を基幹として東安省林口県林口において編成 (人員約一二〇名) 臨時編成改正(甲)下令</p>	
昭16 7 16	<p>編成改正完結、同日より付近駐とん部隊の患者の收容ならびに治療に任じた。 左のとおり分院を開設</p>	
昭17 8 1	<p>滴道分院 東安省鶏寧県滴道(人員三五名、長、医中尉林 尙宣) 梨樹鎮分院 牡丹江省穆稜県梨樹鎮(人員一二名、本院長兼任) 各々付近部隊の患者の收容業務</p>	

## 林口陸軍病院略歴

(関東軍第二五陸軍病院)

通称号 満第五八八部隊 鋭第二一〇八二部隊

2018

昭 20				
8	8	8	8	8
15	11	9	9	9
<p>明月溝着、同日より同地国民学校において野戦病院を開設すべく準備中、停戦。</p>	<p>明月溝着、同日より同地国民学校において野戦病院を開設すべく準備中、停戦。</p>	<p>明月溝着、同日より同地国民学校において野戦病院を開設すべく準備中、停戦。</p>	<p>明月溝着、同日より同地国民学校において野戦病院を開設すべく準備中、停戦。</p>	<p>明月溝着、同日より同地国民学校において野戦病院を開設すべく準備中、停戦。</p>

2019

昭 21	至自			
6	9	9	9	88
	80	4	3	2618
<p>同地において武装解除                  間島第二四作業大隊に編入（将校、看護婦、女子軍属を除く）                  同地出發                  瑋春經由入「ソ」                  将校は入「ソ」の者と残留とに区分され、大部は将校第二梯団に編入、入「ソ」                  「ラーダ」に収容。                  残留の将校、看護婦および女子軍属は延吉のもと日本人居留民会館に収容、延                  吉病院の基幹となった。                  看護婦、女子軍属の半数は延吉出發、通化省臨江県臨江に連行され、八路軍に                  分属、その後帰国したが、昭和二十八年ごろまで留用された者もあつた。</p> <p style="text-align: center;">病院長                  軍医大佐 中尾、六次</p>				

年月日	昭	昭	昭	昭
	20	16	15	12
8	6	8	7	10
9		1	16	中旬
	<p>勃利陸軍病院略歴            (関東軍才七五陸軍病院)            通称号 満才二三三部隊            鋭才一三〇一八部隊</p>			
	<p>概 要</p> <p>三江省勃利県勃利において編成(約一五〇名)爾後付近駐屯部隊の患者の収容ならびに治療に任ず</p> <p>軍令陸甲才一四号により編成改正下令</p> <p>編成改正以来主として転用戦車師団(旅団)関係部隊の患者の収容に当る</p> <p>臨時編成(甲)下令</p> <p>編成完結</p> <p>引続き勃利にあつて傷病者の診療および看護に従事</p> <p>才一方面軍管下の衛生下士官要員の教育を実施(分遣者は約一七〇名、開戦後は原隊に復帰)</p> <p>日「ソ」開戦とともに軽症患者は現隊に復帰せしめ残余の患者は少数の職</p>			
	<p>摘 要</p>			

2021

至自				至自			
10	9	9	11	9	8	8	8
25	21	10	3	1	30	22	17
<p>員の護送の下に列車にて牡丹江に向かい、牡丹江才一陸軍病院に引継ぐ。 看護婦、女子職員は新京に向かつて出発</p> <p>才一方面軍司令官の命令により、吉林省敦化に移駐準備</p> <p>勃利出発、途中牡丹江省寧安縣樺林において「ソ」軍戦車の攻撃をうけ、 掖河より海林にいたり乗車。滨江省哈爾濱を経て吉林省蛟河着</p> <p>蛟河協和会館に野戦病院を開設。新京より看護婦、女子職員も復帰 軍人、軍属および一般邦人の救護に任じた。(収容患者約五〇〇名)</p> <p>蛟河において武装解除、その後も診療業務を続行</p> <p>敦化飛行場に移動、同日より将校、下士官、兵は各各別行動となり、将校 は敦化において将校大隊に編入</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>下士官、兵は敦化才二三六作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>満洲里を経て入「ソ」</p>							

2022



看護婦、女子職員は残留後、壺原島経由帰函

病院長

軍医中佐 谷村一治

少佐 神山幸俊

2023

年月日													概要	摘要	
昭 昭			昭 昭 昭			昭 昭 昭			昭 昭 昭						
10	9	8	8	7	6	6	7	8	7	7	8	7			16
24	18	28	9	15	6		15	1	7 下旬		16	4	10	夏	
<p>病院開設</p> <p>軍令陸甲第一四号により改編下令</p> <p>現役兵到着</p> <p>特臨編第一六関令により編成下令</p> <p>補充員到着</p> <p>編成完結</p> <p>編成改正下令</p> <p>編成下令、関東軍第七六病院と改称</p> <p>浜江省珠江河県一面坡に移駐命令</p> <p>阿城陸軍病院、一面坡分院跡に移駐完了</p> <p>日「ソ」開戦、以後同地において患者の収療</p> <p>一面坡において武装解除</p> <p>下士官、兵は、海林第一四六大隊に編入</p> <p>海林出發、綏芬河經由入「ソ」</p>															

綏芬河陸軍病院  
 (関東軍第七六陸軍病院) 略歴  
 通称号 満第六一部隊  
 鋭第一三〇一五部隊

			昭
			20
	8	8	8
	18	18	9
<p>将校は、将校大隊に編入「ソ」</p> <p>牡丹江第一陸軍病院より患者約二〇〇名収容          新京陸軍病院に向け、患者約二〇〇名を後送          遼陽第一病院に到着、衛生勤務員は、同日付をもって同病院勤務となる。</p> <p>病院長（終戦時） 医中佐 上 島 成 人</p>			

2025

昭 14	昭 15	昭 16	昭 17	昭 18	昭 19	昭 20	自	至
8	10	7	7	6	8	8	8	8
ころ	ころ	15	10				14	9
<p>二道崗 陸軍病院                      (関東軍第七七陸軍病院) 略歴</p> <p>通称号 満第二二〇部隊                      鋭第一三〇二〇部隊</p> <p>概要                      新病院設立のため(二道崗陸軍病院と称した)牡丹江省綏陽県綏陽陸軍病院内において業務開始。                      牡丹江省綏陽県二道崗に移駐、付近駐とん部隊の患者の治療に任ず。                      軍令陸甲第一四号により編成下令                      二道崗において編成改正完結                      爾後同地において付近部隊の患者の治療ならびに収容。                      初年兵を綏陽陸軍病院に教育派遣。                      牡丹江省寧安県石頭に移駐のため収容患者の大部を牡丹江第一陸軍病院に後送り「ソ」開戦となり、重症患者を除き軽症患者を原隊に復帰させた。</p> <p>先 発 隊                      重症患者および一部の職員家族を護送出発、同日牡丹江省、牡丹江第二陸軍病院に収容。ただちに本隊に合流すべく引返す途中、穆稜県磨刀石、代馬溝において、本隊の傷病者を収容、本隊と合流、吉林省敦化に向け後退。</p>								
摘要								

至自昭				
21				
10	8	4	8	8
ころ	ころ		18	15
<p>本隊（残留隊）  建物（病院）を焼却後、牡丹江に向かい出発。  穆稜峠近付において「ソ」軍戦車の攻撃をうけ殆んど全員戦死、生存者は摩刀  石付近において先発隊と合流、敦化に到着。  敦化に到着後同地農学校跡に病院を開設、菅原病院（長 菅原基文軍医中尉、  後銃殺）と称す。  同地において武装解除。逐次「ソ」軍により輸送され、入「ソ」収容された。  中共軍の命により病院を解散。木村病院に合併・看護婦、衛生兵は留用  コロ島經由帰国  病院長  軍医少佐 原 健一</p>				

至自 昭昭 1918	至自 昭 18	昭 17	昭 16	昭 15	年 月 日	概 要	摘 要
7 8	12 7	11	8 7	7			
		20	1	16			
<p style="text-align: center;">寧安陸軍病院略歴 (関東軍才六二陸軍病院) 通称号 満才一〇部隊 鋭才一三〇一三部隊</p> <p>軍令陸甲才一四号付七一により編成下令 牡丹江才一陸軍病院の転属者を基幹として牡丹江省寧安県寧安において編成 臨時編成改正(甲)下令 編成改正完結 寧安において、編成改正(人員約八〇名) 爾後同地において付近駐屯部隊の患者の収容、および治療に任じた。 牡丹江省寧安県、温春、同石頭、同東京城に分院を開設。同地区駐屯部隊患者の収容 この間才一四師団野戦病院(昭和十八年度)の転属者、内地よりの現役入</p>							

2028

11	11	9	9	8	8	8	8				
19	初	27	3	23	12	10	9				
同地出發	一部は崗岡金口大隊（長大尉金口量太）に編入	崗岡病院閉鎖	東京城より寧安県崗岡に向かい航空修理廠跡に病院開設し、崗岡病院と呼称	鏡泊湖畔南湖頭において武装解除	「ソ」軍の命令により病院を閉鎖	鏡泊湖畔大溝に臨時野戦病院を開設	才一方面軍司令官の指揮下を脱し才一二二師団長の指揮下に入り、寧安県先づ敦化陸軍病院に後送、ついで奉天に後送。	東京城、温春の各分院を閉鎖し、本院に合流患者を一部の職員が護送し、收容の患者は吉林省敦化に後送した。	日「ソ」開戦となり、石頭分院の業務を才九七兵站病院に移送り、（才九七兵站病院は才一方面軍司令部の指揮下を脱す）收容の患者は吉林省敦化に後送した。	開戦時人員約二〇〇名（各分院を含む）	隊者、その他各病院よりの転属者をもつて人員を増強した。

至目			自昭 21 20	
105	4	4	410	11
	15	4		21
<p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>一部は牡丹江に向かい満洲軍兵舎跡に病院を開設したが牡丹江才二陸軍病院跡の「ソ」軍病院に患者を輸送し爾後八達溝、蘭崗作業大隊の患者の収容に当り、掖河病院の基幹要員となつた。</p> <p>掖河病院に残留のうち一部の者は掖河訓練才三作業大隊に編入</p> <p>同地出發、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>他の残留者は中共留用者をのぞき全員「コロ」島經由帰園</p> <p>病院長</p> <p>軍医中佐 中島 佐馬之助</p>				



年月日	
概 要	<p>昭 15 昭 17 昭 20</p> <p>7 11 8</p> <p>10 20 上旬</p> <p>敦化陸軍病院略歴            (関東軍才六〇陸軍病院)            通称号 満才九六一部隊            鋭才一三〇二二部隊</p> <p>軍令陸甲才一四号付七一により編成下令            吉林省敦化县敦化において編成完結</p> <p>(担任部隊 延吉陸軍病院)</p> <p>同日より同地において付近駐屯部隊の患者の收容治療ならびに看護に従事</p> <p>前線より後退の各病院の人員をもつて分院をつぎのとおり開設した。</p> <p>一、敦化市内農業学校内 (細谷少佐)            (停戦後菅原病院と呼称長菅原中尉)</p> <p>二、在満国民学校内 (長渡辺少佐)</p> <p>三、パルプ会社医務室 (長桜井少尉)</p>
摘 要	

至自				
10	9	9	8	8 8
初旬	10	3	31	30 9
<p>入。</p> <p>四、満系国民学校内 (長、長野少佐) (停戦後長野病院と呼称)</p> <p>五、秋梨溝分院 (長、長谷川少尉)</p> <p>六、蛟河分院 (長、岸田中尉)</p> <p>七、大石頭分院</p> <p>日「ソ」開戦となり東満地区(寧安陸病石頭分院)よりの重症患者、間島省図們方面より後送された戦傷病者を収容し、その後八月末「ソ」軍によつて撤収されるまで、才一線の才三軍、才五軍関係の部隊よりの後送患者の収容、治療に任じた。</p> <p>「ソ」軍に撤収され全員武装解除</p> <p>病院閉鎖、在満国民学校に収容</p> <p>在満国民学校閉鎖後将校、下士官兵に分離</p> <p>下士官兵は敦化才二五四作業大隊および敦化河上大隊(敦化病院)等に編入。</p>				

	12	11	10
	1	10	20
<p>島經由帰国</p> <p>看護婦、女子軍属はほとんどが残留。中共に留用さる。若干の者は壺盧</p> <p>将校は、木下大佐指揮の将校梯団に編入「ソ」</p> <p>綏芬河經由入ソ。</p> <p>同地出発</p>			
<p>病院長</p> <p>軍医中佐 増沢武男</p>			

年月日	昭15	昭16	昭17
10	7	7	8
10	7	10	1
概要	軍令陸甲第一四号により編成下令 ※液河陸軍衛成病院（昭和八年編成）の要員を基幹として牡丹江において編成完結、同日より付近駐とん部隊の患者の收容ならびに治療に任じた。 特臨編一六令付第七一号により編成改正下令 在満各部隊よりの転属者および東京第二陸軍病院よりの差出し人員をもつて編成改正完結、同時に左のとおり分院を開設。	東京城分院 …………… 寧安県東京城 横道河子分院 …………… 寧安県横道河子 海林分院 …………… 寧安県 海林 寧安分院 …………… 寧安県 寧安	その後寧安分院のみは、寧安陸軍病院となつたが他は各駐とん地にあつて、日
摘要	※液河陸軍衛成病院（昭和八年編成）の要員を基幹として牡丹江において編成完結、同日より付近駐とん部隊の患者の收容ならびに治療に任じた。	料と江そさ成撤※ もとい陸のれ病河 あるい軍のた八院陸 る。資い院丹が、昭軍 。資い院丹が、昭軍	

牡丹江第一陸軍病院略歴  
(関東軍第八陸軍病院)

通称号 満第六六四部隊 鋭第一三〇一一部隊

概要 要

摘要

至自 昭21			至自			昭 20	
4	4 11	12	11	8	8 8	8	7
13	12 25	25	25	24	23 18	15	9
<p>「ソ」開戦時まで、付近部隊の患者の収容に当り、開戦とともに本院に合流。          関東軍第八陸軍病院と呼称（人員約一七〇名）</p> <p>日「ソ」開戦となり、前戦陸軍病院徹収にともない中継病院として後送患者の          収療に任じた。</p> <p>看護婦、女子軍属は哈爾浜、患者は新京方面に後送、東京城、海林分院は合流。          軍司令官の命令により、牡丹江第三陸軍病院を合し、横道河子に後退、（徒歩          行軍、患者はトラック）横道河子分院職員と合流し以後同行動</p> <p>横道河子において武装解除</p> <p>拉古収容所に病院開設（軍馬防疫廠跡）</p> <p>牡丹江収容所に病院開設</p> <p>「ソ」軍より職員が来援（「ソ」軍軍医、看護婦も協力）</p> <p>この期間死亡多発（発疹チブス、栄失）</p> <p>「ソ」軍撤退により中共軍の管理下となる。</p> <p>大部は牡丹江に残留、病院業務の続行、一部は牡丹江（訓）加藤大隊（長 中</p>							

4

15

尉加藤○○)に編入

綏芬河経由入「ソ」

牡丹江に残留した大部(看護婦、女子軍属を含む)は中共軍に留用され昭和二十一年十月頃帰国している。入「ソ」したものは全員の三分の一程度であつた。

病院長

初代 軍医少将 吉野 三郎

二代 " 大佐 三輪 不二雄

三代 " " 広瀬 速見

四代 " " 井原 愛雄

五代 " " 藤本 砂喜

昭 17	昭 15	年月日	佳木斯第一陸軍病院略歴 (関東軍才三八陸軍病院)	
3	7 7			通称号 満才七九一部隊 鋭才一三〇一二部隊
	10			
<p>この部隊の前身は、昭和八年五月ごろ、滨江省哈爾濱市において診療所として付近部隊患者の診療に任じていたが同年秋、三江省佳木斯に移駐し、いぜん診療所としての任務と続行した。</p> <p>昭和十四年に至り、新病棟を建築し、施設を増強</p> <p>軍令陸甲才一四号により、編成下令</p> <p>前記診療所要員を主体として佳木斯において編成完結</p> <p>編成要員 一五〇名(軍医四、下士官一六、兵二一〇、軍属五、看護婦二〇)</p> <p>以後、佳木斯とん部隊の患者の診断ならび収療に任じた。</p> <p>衛生兵等約二〇名を増員した。</p>		概要	摘要	

2037

	昭 20			自 昭 20 19		自 昭 19
8	8	6	1	1 8		7 1 12 11
11	9	<p>衛生下士官、同兵等約三〇名を増員した。</p> <p>湯原県湯原に分院を新設（独工才一八連隊等の衛生業務を担当） 才一〇師団関係部隊および才一方面軍直轄部隊の衛生担任業務を実施した。</p> <p>これにともない次のとおり、分院を設置し業務を分担した。</p> <p>千振分院……………同地航空部隊を担当</p> <p>主として才七一師団関係部隊の衛生業務の担任</p> <p>湯原分院を閉鎖</p> <p>千振分院を閉鎖（航空部隊南方転用のため）</p> <p>日「ソ」開戦にともない、收容患者約六〇〇名中、原隊復帰しうる者、約一五〇名を牡丹江に護送し、牡丹江才一陸軍病院に引継ぎを実施した。また、一部の患者を哈爾濱地区に護送した。（停戦後任務を終了した職員は、方正において主力に合流）</p> <p>西田大尉以下の部隊主力は、佳木斯を出発、水路により方正に向かう。</p>				



9	9	9	9	9	9	8	8	8	8
11	10	20	6	2	1	29	18 20	16	13
佳木斯を出発、松花江を船により行動	下士官兵等は、杉山作業大隊（長中尉、杉山実夫）に編入	「イズベスト・コーワヤ」地区に到着	同日佳木斯出発、松花江を船により行動	将校は大家将校大隊（長中尉大家賢）に編入	作業大隊に編入	佳木斯において将校、下士官兵、看護婦と区別されそれぞれ次のとおり	佳木斯着	部隊全員は方正を出発、佳木斯に向かう。	方正県方正において武装解除
									水路方正に向かう。 方正県伊漢通において主力と合流し、以後同行動
									部隊の残員（院長以下女子軍属）は、佳木斯を出発、主力に追及すべく、

	9	9
	下旬	下旬
	<p>黒河経由入「ソ」。(「ハバロフスク」地区収容所に入所)</p> <p>病院長 軍医大佐 深谷</p> <p>中佐 長谷川 重一</p>	<p>「イズベスト・コーワヤ」地区「クレドール」に到着</p> <p>看護婦等の軍属は、一部の将校とともに漆原作業大隊(長大尉、漆原好寛)に編入、同日往木斯出発</p>

年月日	概	要	摘要
昭 15 7 10	昭 16 7 16	昭 17 11 20	自昭 18 昭 19 昭 20
	軍令陸甲才一〇号により編成下令 三江省、佳木斯において編成完結 編成要員約七〇名（軍医六、下士官一〇、衛生兵五〇、看護婦六） 佳木斯駐とん部隊の衛生業務の担任 臨時編成改正（甲）下令 編成改正完結 部隊職員を約九〇名に増員し、編成改正 佳木斯地区近接部隊等の衛生業務の担任 現在、収容患者約一二〇名であつたが、桜演習参加のため、後送約六〇名、原隊復帰五五名各実施した。		

## 佳木斯第二陸軍病院略歴

(関東軍才九〇陸軍病院)

通称号

満才六九六部隊

銳才一三〇二一部隊

2041

	9	8	8	8	8	7	7	
	18	16	15	14	9	18	15	
隊主力は蒙古力収容所に入所	同行の患者を当地に開設中のもと興山陸軍病院に移送後、看護婦を徐く部 向かう。同日佳木斯着	「ソ」軍の命により、職員ならびに患者全員、水路方正を出発、佳木斯に 向かう。同日佳木斯着	方正に到着、同日同地において武装解除後、病院を開設、依蘭地区戦傷者 等を収容し診療を実施	方正県伊漢通に上陸し、以後徒歩行軍により方正に向かう。	部隊（病院）は、方正に向かい大羅勒密を水路出発	に後送するよう依頼、軽症患者は、原隊に復帰せしめた。	日「ソ」開戦と同時に、重症患者を佳木斯才一陸軍病院に護送し、哈爾濱 衛生業務を担当、同地区の患者約五〇名を収容し診療に従事	大羅勒密に上陸、同地に野戦病院を開設し同日より同地区陣地構築部隊の う。

	10	10
	22	13
<p>看護婦の大部は、もと興山陸軍病院に入り、蒙古力収容所病院（仮称）に勤務</p> <p>部隊の主力（将校、下士官兵）は、佳木斯において木村作業大隊（長、大尉 木村義巳）に編入、同日佳木斯出發、松花江と船により行動</p> <p>「ハバロスク」地区収容所に入所</p> <p>看護婦群の以後の行動については、個人ごとに相違しており、細部は不明であるが、昭和二十一年一月上旬、「ソ」軍が撤退後、八路軍に移管されるまでは、蒙古力において病院勤務、その後は現地残留の者、八路軍に従軍する者などその行動、状況は区々であった。</p> <p>病院長</p> <p>軍医中佐 中野 義 雄</p>		

年月日	概要	摘要
昭 15 8 7	軍令陸甲才一四号により編成下令 臨時編成(甲)下令	
昭 16 7 7	三江省鶴立県鶴岡(興山)において編成着手 編成要員(在滿各陸軍病院、同各野戦病院) 編成完結(人員約八〇名)	
昭 17 11 11	同日より付近駐屯部隊(主として歩兵才三六六連隊)の患者收容に任じた。	
昭 20 10 10	興東軍才九一陸軍病院と改称(人員約一三〇名) 日「ソ」開戦と同時に怪症患者を原隊に復帰させ、全員(重症患者をふくむ)佳木斯に移動。	

## 興山陸軍病院略歴

(興東軍才九一陸軍病院)

通称号

満才九三一部隊  
鋭才一三〇二三部隊

2044

昭 20	至自 昭 21	至自	至自	至自	至自	至自	至自	至自
10	8 10	10 9	9	9 8	8 8	8	8	8
12	20 12	11 11	6	5 21	20 19	15	12	11
<p>重症患者を佳木斯才一陸軍病院に送り、富錦陸軍病院と合流し、佳木斯才二陸軍病院に入る。</p> <p>佳木斯阜頭を出港、水路方正に向かう。</p> <p>方正（伊漢通）上陸</p> <p>同地において全員武装解除</p> <p>横泥河屯開拓団小学校において病院開設</p> <p>佳木斯才二陸軍病院の援助業務（所在地伊漢通）</p> <p>方正出發、佳木斯に移動、蒙古力病院をつぎの場所に開設した。</p> <p>架橋材料才三二中隊跡</p> <p>才一工兵隊司令部跡</p> <p>患者は、各部隊の軍人および邦人混合ではほとんど難民収容所の状況であった。</p> <p>入「ソ」状況</p> <p>佳木斯において病院開設中、下士官以下および男子軍属は佳木斯編成の木</p>								

	12
	26
<p>病院長</p> <p>軍医中佐 園田 左武郎</p>	<p>村作業大隊（長、大尉 木村義巳）に編入、松花江經由入「ソ」。</p> <p>少数の将校は退院患者と共に、松花江經由入「ソ」</p> <p>看護婦女子軍属は入「ソ」することなく中共に留用壺蘆島經由帰国した。</p>



昭	昭	昭	昭	年月日	富錦陸軍病院略歴 (奥東軍才九二陸軍病院) 通称号 満才一二〇部隊 鋭才一三〇二四部隊		
20	16	15	14			8	概
8	7	7	8				
9	1	16	10	8	要		
<p>三江省富錦県富錦において佳木斯才一陸軍病院富錦分院として編成以來、付近駐屯部隊の患者収容ならびに治療に任じた。</p> <p>軍令陸甲才一四号により編成改正</p> <p>佳木斯才一陸軍病院富錦分院を改編し、富錦陸軍病院を編成</p> <p>特臨編才三号により編成改正下令</p> <p>編成改正完結(人員約一〇〇名)</p> <p>同日より富錦において駐屯部隊の患者の収容および治療業務</p> <p>富錦駐屯隊初年兵の衛生教育を実施</p> <p>(開戦とともに全員原隊復帰させた。)</p> <p>日「ソ」開戦となり収容患者の大部を原隊に復帰させ、職員的主力は重症</p>					摘要		

2047

9	9	11	10	8	8	8	8	8	8	8	8
11	10	3	14	31	30	28	25	18	17	16	11
同地出発	下士官兵は敦化才二三六作業大隊に編入	綏芬河經由入「ソ」	敦化（沙河沿）より牡丹江に向かう。	部隊解散后将校は敦化飛行場収容所に入り将校大隊に編入	吉林省敦化に移動	「ソ」軍の命令により野戦病院において、いぜん一般避難民の診療続行	蛟河において武装解除	蛟河着、以後同地に野戦病院を開設。軍人および一般邦人の診療に任じた。	同地出発、吉林省蛟河県蛟河に向かう。	哈爾濱着	患者をとめない同地出発。水路樺川県佳木斯に後退 佳木斯着、患者を下船させ、佳木斯才一陸軍病院に収容し浜江省哈爾濱に向かう。

10				
25				
満洲里経由入「ソ」				
病院長	初代	二代	三代	四代
軍医中佐	少佐	中佐	少佐	少佐
田村	小石	河井	渡辺	得三
楠五郎	義夫	武夫		

(要訂正) P257

- 昭20. 5. 移居南方高地 → 北方高地
- 8. 9. 小笠嶺へ移動 → 密江全陸地へ
- 8. 15. " へ 停戦 → " " へ
- 8. 16. 同地へ 司令官自決 → 8. 17 夜 9. 8. 18 朝
- 12. 1. 司令官 中尉 → 中將

pp. 5, 1.

元 考 務 部 中 尉 川 名 孝 藏

昭					昭		年
20					19		
8	8	8	8	8	8	7	
31	18	16	15	9	10	12	日
<p>第一一二師団司令部略歴</p> <p>通称号、満第七八六部隊 公第一三一八〇部隊 公第二〇三一五部隊</p>							
<p>略歴</p> <p>軍令陸甲第八二号により編成下令 間島省琿春において編成完結 （昭和十九年七月沖繩、宮古島に転用した第二八師団の残置者を基幹人員とし、在満各部隊からの転入者をもつて竜江省齊々哈爾において編成に着手し、八月七日間島省琿春に移駐） 同日より同地付近の警備 琿春南方高地の陣地構築 日「ソ」兩戦により構築中の陣地（小盤嶺）に移動 小盤嶺において停戦 同地において司令官、自決し、琿春付近において参謀長自決、なお兵器部職員全員も自決した。 琿春県密江峠に集結、武装解除をうけ琿春飛行場に収容 金倉収容所に移動</p>							
							摘要

	12	11	10	9	10	9	9
	1	11	20	20	22	17	15
	<p>主力は金蒼第五七作業大隊（大尉 久田見 環）に編入          金蒼出発          「ソ」満国境理春經由入「ソ」          将校は金蒼收容所出発、同日間島将校收容所に收容          間島将校第二作業大隊（大佐 品部孝晴）に編入          間島出発          「ソ」満国境理春經由入「ソ」          司令官          中尉 中村 次喜 蔵          将</p>						

昭 20						昭 19	
8 5 5 8						8 7	
15						15 12	
8 5 5 8						8 7	
15						15 12	
中崗子にあつた一部は密江屯に移動						軍令陸甲第八二号により編成下令	
「ソ」軍の攻撃をうけ、一部は分敢自由行動をとる						北安省嫩江において編成完結	
春化残留隊は「ソ」軍の進入にともない十里坪の主力陣地に追及すべく行動途中						（昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した歩兵第三〇連隊の残置者を基幹人員とし、在滿各部隊からの転入者をもつて編成）	
日「ソ」開戦にともない中崗子にあつた主力は十里坪、北荒嶺、中崗子西方の守備						間島省琿春県春化（土門子）に移駐	
現地応召者の編入						同日より同地付近の国境警備	
第一大隊は春化に残留、国境警備						主力は中崗子に移駐、陣地構築	

## 歩兵第二四六連隊略歴

通称号 公第一三一二〇部隊  
公第二〇三二〇部隊

略 歴

摘要

至自											
11	11	10	10	9	9	8	8	8	8	8	8
7	3	20	5	2	17	17	29	25	24	23	19
<p>密江峠において武装解除をうけ金倉収容所に収容、後日収容所において連隊主力と合流した。</p> <p>中崗子の主力は中崗子出発同日十里坪の連隊本部に合流</p> <p>春化残留隊の大部は十里坪の連隊主力に合流北荒嶺の部隊も主力の武装解除までに合流した。</p> <p>現地応召者の大部の者は部隊と別行動となり応召前の住所および北鮮に向け出発した。</p> <p>琿春県十里坪において武装解除をうけ金倉収容所に収容</p> <p>金倉第五一作業大隊（大尉 岡 克己）に編入</p> <p>金倉第五七作業大隊（大尉 久田見 環）に編入</p> <p>金倉収容所出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p> <p>将校は間島将校第一作業大隊（大佐 谷 岩藏）に編入</p> <p>間島収容所出発</p> <p>「ソ」満国境滿州里經由入「ソ」</p> <p>連隊長</p> <p>大佐 山本 稜 威</p>											



昭		昭		年	略	歴	摘要	
20		19						
5		8		月	略	歴	摘要	
下旬		下旬						
19		15		日	略	歴	摘要	
<p>現地応召者編入</p> <p>連隊の主力陣地を小盤嶺に構築のため一部を国境警備に残し、主力をこれにあてる。</p>		<p>瑯春に移駐完了</p> <p>国境警備および陣地構築</p> <p>(歩兵第八八連隊(満第七二八部隊)が佳木斯に移駐後の兵舎に移りその任務を継承</p> <p>馬滴達、石磊子山、大荒溝、岩山等の陣地の警備</p>		7	8	<p>軍令陸甲第八二号により編成下令</p> <p>哈爾濱孫家において編成完結</p> <p>(昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した歩兵第三連隊の残置者を基幹人員とし、在満各隊からの転入者をもって編成され、八月十一日頃より逐次間島省瑯春に移駐)</p>	7	8

## 歩兵第二四七連隊略歴

通称号

公第一三一二五部隊  
公第二〇三二五部隊

至自 至自 至自												
10	9	9	9	9	8	12	11	10	8	8	8	
7	22	20	18	2	24	1	11	20	下旬	18	17	9
<p>日「ソ」開戦にともない各陣地の守備隊は小盤嶺の主陣地に後退          琿春および密江峠において武装解除、同日琿春飛行場に収容          金蒼収容所に移動、将校、下士官兵に区分され将校は間島収容所に収容          間島将校第二作業大隊（大佐 品部孝晴）に編入          間島出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p> <p>主力は 金蒼第五二作業大隊（大尉古川又十郎）          金蒼第五三作業大隊（大尉尾形忠行）に編入</p> <p>金蒼出発</p> <p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p> <p>連隊長          大佐 西崎逸雄</p>												

昭 19	年	昭 20	自	至
7	月	8	8	8
12	日	15	20	18
	略			
	歴			
	摘要			

歩兵第二四八連隊略歴

通称号 公第一三一二八部隊  
公三〇二八部隊

軍令陸甲第八二号により編成下令  
竜江省齊々哈爾において編成完結  
（昭和十九年七月冲繩宮古島に転用した歩兵第三六連隊の残置者を基幹人員とし、在滿各隊からの転入者をもつて編成）  
同日より同地付近の警備  
移駐のため齊々哈爾出発  
間島省間島（延吉）に到着、同日より同地付近の警備  
主力は図們に移駐し、同地付近の陣地構築、一部は間島に残留  
現地応召者漏入  
主力の一部は、日「ソ」開戦にともない珲春県密江屯、汪清県三道溝に前進）  
停戦により各駐屯地において部隊を解散し、小グループに別れ、その大部は、  
間島、明月溝に或は北鮮を目指して行動したが、現地応召者は応召前の住所に  
向つて行動した。

2057

	9	9	8	8	8
	8	2	20	17	19
<p>           図們において武装解除をうけた者は、九月二日間島収容所に収容            間島残留隊は間島において武装解除            間島収容所に収容されたものの主力は八月二十七日間島第二五作業大隊（属枝、            梅田歳一）に編入            間島出發            「ソ」満国境瑛春經由入「ソ」            その他の者も間島各作業大隊に編入され瑛春經由入「ソ」            連隊長            大佐 広瀬利善         </p>					

										昭 20	年	
10	9	9	8	8	8	8	8	8	7	7	月	
8	19	18	18	17	16	15	12	9	30	10	日	
<p>「ソ」満国境琿春經由入「ソ」</p> <p>金蒼出発</p> <p>その主力は金蒼第五作業大隊（大尉千田義勝）に編入</p> <p>琿春飛行場に収容された。</p> <p>主力は密江峠において武装解除</p> <p>密江峠において「ソ」軍と交戦</p> <p>密江峠において戦闘中の師団工兵隊、独立臼砲第一中隊を併せ指揮</p> <p>各隊は密江屯陣地に転進、一部は現地に残留</p> <p>等の陣地に分散配備</p> <p>日「ソ」開戦にともない中崗子、大荒溝方面、馬滴達、三道溝、琿春北側高地</p> <p>同日より同地付近の警備</p> <p>琿春において編成完結</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令</p>										略	歴	
<p>第一一二師団挺進大隊略歴</p> <p>通称号 公第二〇三五五部隊</p>												摘要

至自 至 自				至自			
10	9	9	9	8	10	9	8
25	23	2	1	18	1	27	19 24
<p>又若干のものは、主力とはなれ北鮮に入り、古茂山収容所に収容された。</p> <p>隊 長</p> <p>少佐 佐野隆夫</p>				<p>一部は金蒼第五六作業大隊（中尉竹下百馬）に編入</p> <p>金蒼出発</p> <p>「ソ」満国境理春經由入「ソ」</p> <p>一部は密江屯に集結することなく分散行動し、間島方面に向かいその後横道河子、十里坪間島等でそれぞれ武装解除をうけ、その大部は間島収容所に収容</p> <p>間島第二九作業大隊（少尉大槻春夫）</p> <p>間島第三〇作業大隊（中尉鈴木）に編入</p> <p>間島出発</p>			

昭 至自		昭		年
20		19		
8	7 7 5 5	4 9 8	8 7	
9	31 10 19 9	2216	15 12	日
<p>通称号 満第二一二部隊 公第一三一三六部隊 公第二〇三三六部隊</p>				略
<p>軍令陸甲第八二号により第一一二師団砲兵隊編成下令 竜江省齊々哈爾において編成完結 （昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した野砲兵第二八連隊の残置者を基幹人員とし、在滿の他部隊からの転入者をもつて編成） 編成完結直後より逐次間島省琿春に移駐同地の警備 主力は密江屯において陣地構築 一部（第二大隊）は図們において陣地構築 塚本少佐着任 現地応召者の編入 軍令陸甲第一〇六号により野砲兵第一一二連隊編成下令 琿春において編成完結 （第一一二師団砲兵隊を改称） 日「ソ」開戦にともない図們に在った第二大隊は、密江屯の部隊主力陣地に前進</p>				
				摘要

10	9	9	8	10	9	9	8	8	
1	27	19	24	7	22	18	2	29	18
密江峠において武解解除									
金齋収容所に収容									
主力は金齋第五三作業大隊（大尉尾形忠行）に編入									
金齋出発									
「ソ」満国境琿春經由入「ソ」									
一部は金齋第五六作業大隊（中尉竹下百馬）に編入									
金齋出発									
「ソ」満国境琿春經由入「ソ」									
連隊長									
初代 少佐 岡崎 利行									
二代 少佐 塚本 清太郎									



昭		昭		年		第一一二師団工兵隊略歴
20		19		月		
8	8	7	5	8	7	
12	9	末	10	25	28	15
12	9	末	10	25	28	15
昭20年8月12日		昭19年7月25日		昭19年8月28日		略歴
<p>明月溝出発、一部明月溝に残置</p> <p>明月溝において日「ソ」開戦</p> <p>一部を密江屯に残置し主力は明月溝に転進</p> <p>現地応召者編入</p> <p>一部は琿春に残留</p> <p>主力は密江屯に移駐陣地構築</p> <p>同日より同地付近の警備</p> <p>間島省琿春着</p>		<p>移駐のため齊々哈爾出発</p> <p>間島省琿春着</p> <p>同日より同地付近の警備</p> <p>主力は密江屯に移駐陣地構築</p> <p>一部は琿春に残留</p> <p>現地応召者編入</p> <p>一部を密江屯に残置し主力は明月溝に転進</p> <p>明月溝において日「ソ」開戦</p> <p>明月溝出発、一部明月溝に残置</p>		<p>軍令陸甲第八二号により編成下令</p> <p>竜江省齊々哈爾において編成完結</p> <p>(昭和十九年七月沖繩宮古島に転用した工兵第二八連隊の残置者を基幹人員として編成)</p>		略
						摘要

	9	9	8	8	8	10	9	9	8	8	8	8	8	8
	21	14	28	27	17	2	21	17	31	28	18	17	16	14
隊長	「ソ」満国境琿春經由入「ソ」 間島出発 間島第二三作業大隊（見士 中間陸）に編入 間島収容所に収容 明月溝残留隊は同地において武装解除 「ソ」満国境琿春經由入「ソ」 金蒼第五七作業大隊（大尉久田見環）に編入 金蒼着 琿春出発 密江峠において武装解除後琿春飛行場に収容 「ソ」軍と戦闘 密江峠に到着													
少佐 尾形茂人														